

辨策聖者
光明大系

光明の生活

辨榮聖者の御肖像

大正九年七月、満六十一歳

北九州市若松区安養寺庭園にて



辨榮上人觀自在菩薩圖

大正七年五月柏崎市極樂寺にてお迎えの車すでに待ちおるとき、帽子もかぶられたまま咲子夫人のために画かれたもので、上人の形見のごとく護持されていたのを、大正十四年九月東大在学中のわたくしに持参していただいた。同夫人にたいしてのみは上人が妹と呼ばれていることを書簡のうえでも見出すので、たとえば空外編辨榮上人書簡集一三五にも「あによりいもとさきさま」とあり、かかる例は他の人びとに全く類のないことである。それはどまでにお浄土の深い縁を感じられたのであろう。わたくしも、その実感の模様を何度も承ったことがある。それだけに、この観音図はとくにありがたいので神品といえる。賛は「行誠和上之道詠」として「三十あまり三つの浦船さす棹の普門示現やひまなかるらむ」とある。

絹本 七四・五×二六・五_{cm}

(山本空外蔵)

光 弁
明 榮
大 聖
系 者

光
明
の
生
活

凡 例

校正は、『光明の生活』（大正十三年十二月二十日発行・編輯兼発行人田中木叉・発行所ミオヤのひかり社）を底本としたが、旧漢字は新漢字に改め、また、仮名づかいとルビはともに現代仮名づかいに改めた。そして、明らかに誤植と思われるものは適宜改めた。さらに、文章理解の立場から句読点も改めた。

したがって、本書は、現代文の感覚に立って読み易いように諸作業を施したものである。

参考までに簡単な書名・人名の索引を巻末に付しておく。

目次

釈尊出世の本懷 (九)	大慈父 (九)	子等が汚を聖む (二〇)
………	聖き同胞 (二二)	

第一編 三縁 (二三)

第一章 親縁 (二五)	仏心は大慈悲 (二七)	親愛 (二七)
-------------	-------------	---------

親縁の中心は愛 (二〇)	愛樂 (二三)	如来より衆生に対する愛 (二四)	我子を愛するミオヤの大悲 (二六)	三種の愛に比例して親縁を明す (二九)	母子的に例すべき愛 (三一)	大悲の靈乳 (三二)	愛の発達 (三三)	愛の養い (三四)	生育の親縁 (三六)	………	摂取の親縁 (四三)	智慧の父慈悲の母 (五〇)	愛の感応 (五四)	靈育 (五六)	異性相愛 (五八)	如来の妙色身は大愛の化現 (六一)	靈の愛 (六三)	靈の恋 (六六)	欣
--------------	---------	------------------	-------------------	---------------------	----------------	------------	-----------	-----------	------------	-----	------------	---------------	-----------	---------	-----------	-------------------	----------	----------	---

慕は自然悟道の密意 (七)……………理性より出づる愛 (八六)……………天性と理性との愛 (八八)……………靈性的の愛 (八九)……………愛は生命 (九三)……………大慈悲の靈力 (九五)……………春の氣と桜花 (九六)……………親縁と疎縁 (九八)……………最上の親密 (一〇一)

第二章 近縁 (一〇九)……………心光の形式と内容 (一一二)……………鏡智と衆生直觀との致一的近縁 (一二四)……………感覺と觀念 (一二七)……………自然界と心靈界 (一二八)……………攝取の光明は心靈界に帰せしむ (一三〇)……………能觀の心と所觀の心光と機能致一の故に近縁 (一三一)……………觀念は絶対無礙 (一三三)……………鏡智光明裡の直觀 (一三四)……………鏡智と近縁 (一三八)……………感覺の遠縁 (一三〇)……………機能致一の近縁 (一三三)……………能觀の心と所觀の仏心 (一三四)……………近縁の神秘 (一三九)……………神秘の第一関門 (一四〇)……………体につき相即の關係により近縁 (一四二)……………用に約して相入の神秘的近縁 (一四三)……………感応の近縁 (一四五)

……妙觀察智と近縁（一四八）……………察智の總相（一五〇）……………相互に交
 渉相入の妙相不可思議（一五〇）……………用に約して一多相容の關係（一五二）……………
 ……体に約して相即無碍（一五三）……………察智の自然界方面（一五五）……………自然
 界中啓示（一六一）……………心靈界の啓示（一六三）……………生仏感応（一六四）……………
 ……相入の關係（一六六）……………体に約して相即（衆生心を廢して仏心に立つ）（一六八）
 ……念仏摂取の如来智慧光明（一六九）……………互映無碍の故に近縁なり（一七
 〇）……………觀察感応の故に近縁（一七〇）……………近縁（一七四）

第三章 増上縁（一七五）……………弥陀の本願（一七九）……………本願力の増上（一八〇）……………
 ……三の増上縁（一八二）

一、破闇為明増上縁（一八三）……………仏智見啓示（一八七）……………啓示の真否（一九二）
 ……大乘仏教と啓示（一九三）……………見仏の心状（一九六）……………啓示の真
 理（一九九）……………啓示の三（二〇一）……………聖道の浄土と浄土の浄土（二〇五）

二、拔苦与楽増上縁（二四〇）……………人生の苦惱（二三）……………感情の靈化（三二）

……………苦惱の主我（二三）……………煩惱（罪過感情）（三五）……………苦毒と

煩惱との関係（三八）……………自ら苦悶す（三九）……………如来に依りて解脱す

（三〇）……………帰命、融合、安立（三三）……………人生の幸福と不幸福（三九）……

……………光明に向える人（二四〇）

三、滅罪生善増上縁（二四一）……………降魔の増上縁（二四九）……………転道の増上縁

（二六五）……………意志靈化（二七）……………正道（二七九）

解脱と救済と摂化（二八六）……………念仏（二八〇）……………釈尊の垂範（二九三）

第二編 五徳（二九五）

一、今日世尊住奇特法（二九七）……………法身の奇特の法（三〇〇）……………報身の世尊

（三〇三）……………報身の奇特の法（三〇五）……………心身の世尊奇特の法（三〇）……

……………世尊と宗教心（三三）……………奇特に方便と目的（三五）……………仏徒舍利

弗の神変 (三〇)……………仏滅後仏徒の奇特 (三〇)……………奇特につきて卑見 (三二)……………斯教の奇特法 (三三)……………斯の如き神聖なる權威 (三五)……………吾人いかに世尊に倣う可き (三六)

二、今日世雄住諸仏所住 (三八)……………仏陀は世の大雄者 (三九)……………釈尊凡位の苦悶 (三三)……………生死解脱の求道 (三四)……………釈尊諸仏の所住に安住所を得 (三七)……………衆生顛倒を遠離すべく (四〇)……………顛倒を醒て絶対の安住を求む (四五)……………光明主義の四諦 (四六)……………人生は向上の一路 (五〇)……………苦悩と罪惡の苦悶 (五三)……………帰命(感情の信仰) (五五)……………帰命 (五九)……………融合と心情の信仰 (六二)……………安住 (六六)……………情操 (六八)

三、今日世眼導師の行に住す (七三)……………知力の信仰 (七四)……………世眼の意義 (七五)……………仏陀は自覺の道を求め玉いき (七六)……………仏陀の自覺 (三八)……………正覺と涅槃 (三九)……………正覺と無量光 (四三)……………涅槃と無

- 量寿 (三八四) 弥陀の智慧光と仏陀の世眼 (三六七) 自覺の要ある我等
 (三八八) 見惑の先天的と後天的 (三九〇) 靈魂有無説の概略 (三九四)
 靈魂種々の説 (三九五) 人生帰趣の標準 (三九八) 初に宇
 宙大法 (仏法) (三九九) 哲學的に終局目的の法 (四〇二) 重ねて諸法
 の実相 (四〇三) 宇宙の大道 (四〇四) 三種の菩提 (四〇五)
 大宗教家としての仏陀 (四〇七) 衆生伏能の開発 (四〇八) 人の性元
 (四一〇) 大乘教の衆生の根底 (四一二) 大宗教家としての仏陀 (四二四)
 仏陀世眼が指導の目的 (四二五) 宗教的の開示悟入 (四二七)
 仏知見の靈相 (四二八) 開 (感覺的啓示) (四二九) 示 (写象的啓示)
 (四三〇) 悟 (法身理想啓示) (四三一) 入 (四三三) 結論 (四三三)
四、今日世英住最勝道 (四三五) 仏陀は世の英靈 (四三六) 最勝道と無
 量光 (四四〇) 道德の意義 (四四二) 人格の三種 (四四三) 十

界の性格 (四三五)	四聖道 (四三七)	人間中の十界 (四三九)
人格具備せる三等 (四四二)	靈格三位 (四四四)	大乘の道德 (四四八)
..... 菩提心 (四五〇)	願生心 (四五二)	願作仏心 (四五四)
..... 願度衆生心 (四六一)	願共衆生同得安寧 (四六五)	
五、天尊行如來德 (四六八)	天尊と如來の德 (四六九)	行如來德 (四七〇)
..... 初の天尊と終の天尊 (四七三)	弥陀光明の反映たる三相五德 (四七六)	
第二編 三相 (四七七)		
聖者の表情 (四七九)	教主出世の本懷 (四八一)	吾等のみおやの容器
(四八三)	諸根悦予 (四八九)	姿色清浄 (四九二)
..... 念仏三昧の生理的調適 (四九八)	光明主義に就いて (五〇一)	
附録 如來光明札拜儀 (五〇三)	弁榮聖者略伝 (五〇三)	聖きみくに
(五一四)	念仏七覺支 (五一六)	

光明の生活

三 縁

親縁

近縁

増上縁

五 徳

世尊住奇特法

世雄住諸仏所住

世眼住導師行

世英住最勝道

天尊行如来徳

三 相

諸根悦予

姿色清浄

光顔巍巍

釈尊出世の本懷

釈尊しやくそん此世このよに出いでましなされて、生涯しやうがいに互わたつて一もつぱら御力おちからを尽つくし為なされた御本懷ごほんがいは那邊なへんにありやとなれば、蓋そは世よの群もろもろの衆生しゆじやうが心こころの闇やみと悩なやみと罪つみにより、闇やみの裡うちにさまよいあるを慰あわれみ、凡すべての人類じんるいを明あかるきと安やすきと聖きよきに復活ふつかつさせ而しかして円満えんまんなる人ひととし永遠えいえんの光明こうみやうに導みちびかんが為ために世よに御出おでましなされた。經きやうに「如来にやらいわ無尽じんだい大悲ひを以もつて三界がいを矜あわれみ光ひろく道教どうきやうを闡ひらき、群萌ぐんもうを拯すくわんと欲ほつし、恵めぐむに眞実しんじつの利りを以もつて」と。恵めぐむに眞実しんじつの利りとは如来にやらいの慈父じふの光明こうみやうを獲得ぎやくとくして聖人きよひとと生うまれ更かわつて現世げんせを通つうじて永遠えいえんの生命せいめいを得えせしめんとおの御慈悲おじひなり。

大 慈 父

宇宙うちゆうに唯一だいいの大慈父だいじふとは何いずれに在ましますや。釈尊しやくそんの本地ほんじ一切聖人さいせいじんの共ともに讃称ほめたえて止やまざ

ところ によらい、宇宙 最高の 淨き 處に 在して 慈悲と 威神との 光明を以て 一切の 人類
 の 心の 闇と 悩と 罪との 汚より 救霊の 靈力を 与えた まう 最尊者に 在ます。 喩え ば 世界 の
 一切の 生物は 太陽の 光に 依らざれば 生存すること 能わざる 如く、 人の 心靈は 大慈父の
 慈愛の 光明に 由らざれば 生存すること 能わす。 如来は 心靈界の 大日輪にして 一切の
 人類を 永恒の 光明 中に 摂めて 聖き 生命に 靈化し 光明の 裡に 聖き 人とし 円満なる 靈
 格とした まう 大慈父に します。 經に「如来 威神 光明 最尊 第一にして 諸仏の 光明 及
 ぶこと 能わざる 所なり」と、 又「如来は 光明 徧ねく 十方 世界を 照し 念仏の 衆生を 摂
 取して 捨て 玉わず」と あり 唯一の 慈父の 光明の 外に 衆生の 心靈を 救うもの あること
 なし。

子等が汚を聖む

宇宙間無量の世界に生きとし活けるものとして、悉く皆如来の子にあらざるものなし。故に經に「三界我有、其中衆生悉皆我子」と示されて居る。我等は本如来の聖子たる靈性を具有て居る。喩えば純金も本は鉞垢の中に在った如く、衆生の心靈は煩惱垢の中に存す。故に之の汚を清むるにあらざれば聖子の靈徳は顕われぬ。然らば如何にして我等は聖めらるることが出来よう。蓋は教祖釈尊の教示に随いて如来の光に触れて初めて心靈は清めらるる。如来の靈光に感ずる時は闇と悩と罪との汚垢より清められ、靈に充されて意と共に身も柔和温良となり、如来の円なる如くに円なる人となり、心広く体肝かに、平和と歡喜とに満たされ、いと靈福の心の生活を為し得られ、又如来の聖意を身と意と口との行為の上に現わるるようになし給う。經に「其れ衆生ありて斯光に遇う者は三垢消滅し身と意と柔軟に歡喜踊躍して善心生ず」と示されたり。

聖き同胞

一二

唯一の大慈父の光に由つて如来の聖子たることを自覚し人格も一変し来りて観ずれば、一切の人類は本一人の慈父によりて互に同胞なる事を信ぜらる。然るに世の人々は唯肉体許りを我と謂うて靈の大慈父在ますことを識らぬ。故に全く同胞の真意が表われぬ。慈父の光によらず、自ら闇と悩と罪とに埋れたるものに対して同情に耐えぬ。願くば同胞に大慈父の在すことを信ぜしめ、大光明の中に共に光榮をうけ共に靈福をわかち永遠にまで大安寧を得んことを望み相携えて光明の中に益々靈きに向上せんとを祈るものである。